

FC77
31

FC11

31

東京文理科大學教授

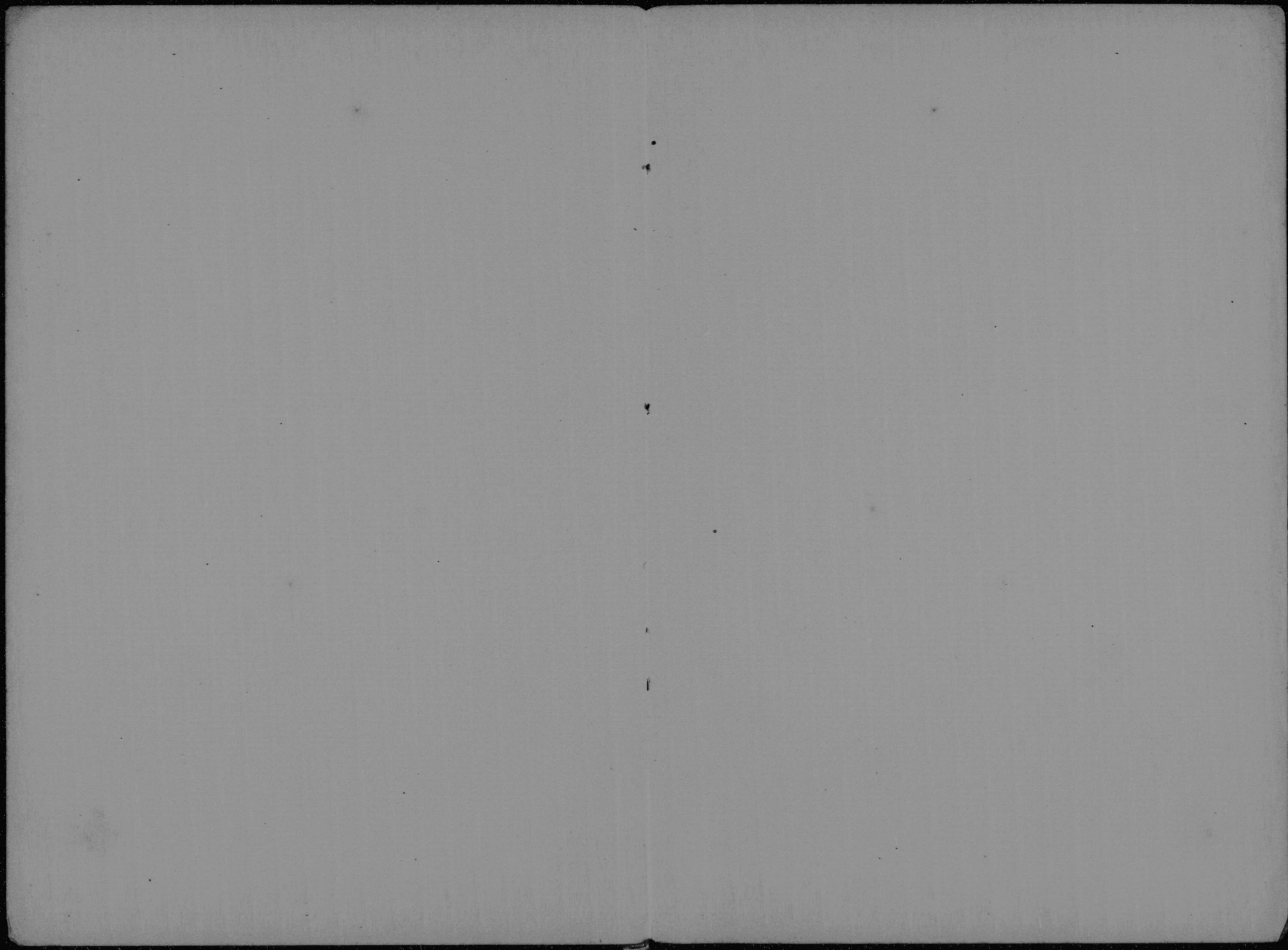
神保格著

小學國語讀本朗讀法(卷三)

尋一後期用

武知訓





東京文理科大學教授

神保格著

小學國語讀本朗讀法(卷二)

尋一後期用

FC77
31



989200

はしがき

本書は先に公にした小學國語讀本朗讀法(卷一)第一前期用に續き、同じ趣意を以て作つたものである。

例によつて各課の斷續・速度・抑揚調子の記述にあたり馬淵冷佑氏の有益な助言を得たことを感謝する。

昭和八年九月

著者

小學國語讀本朗讀法(卷二)

[尋一後期用]

序 説

朗讀法とは何をいふか、最も良い朗讀、朗讀と默讀等については本書卷一(尋一期用)の序説に述べた。今此處には次の本文に記す事柄の了解を助けるため必要な事項を總括的に説明する。

[甲] (イ) 發音

(ロ) アクセント

[乙] (イ) 斷續

(ロ) 速度

(ハ) 抑揚調子

右の様に分けたのは最も良い朗讀に必要な箇條である。[甲]といふのは一般的箇條である。一般的とはどんな種類の文章でも又どんな内容を含んだ文章にも當

てはまるものといふ意味である。故に此の中に含まれる(イ)發音、(ロ)アクセント、此の二つを正しくすることは最も良い朗讀、否一般の話言葉、即ち日常の談話演説等の基本となり骨組となるものである。發音とアクセントといふ一般的箇條が正しく出来てゐなければ、どんな言葉も決して良い言葉といふことが出来ない。しかし此の基礎さへ出来れば、その他の箇條は不要であるかといふと、決してさうでない。基礎だけではまだ不足である。家の土臺だけ出来たのではまだ實用にならない。骨だけではまだ生命が無い。此の外に必要なのは

〔乙〕の特殊的箇條

である。特殊とは一つ一つの文章に應じて變るものといふ意味である。一つの文章にはその文章に限る一定の意味があり特殊な心持が含まれてゐる。同じ文句を使つた一つの文章でも前後の續き工合によつて特別な意味や心持が附いて來る。この一々のちがひを音聲によつて表現しようとするには、前の〔甲〕に擧げた一般的箇條の外に、(イ)聲の斷續、(ロ)言葉の速度、(ハ)抑揚調子を一々變へなければならぬ。この特殊的箇條を最も有効に利用することに依り、しつかりした基礎の上に立派な家が建ち、骨組の上に肉が付き血が通ひ生命が躍動するのである。

但し茲に一つ注意すべきことがある。〔甲〕と名づけた一般的箇條は必ず守らなければならぬ不動の規範である。どんな文章を朗讀するにも又何人が朗讀するにも、必ず是だけの箇條が正しく行はれて居なければならぬものである。之に反し、〔乙〕と名づけた特殊的箇條は一々の文章によつて變る外、朗讀する人の心持や解釋の如何によつて或程度まで自由の許されるものである。勿論朗讀する各個人の自由であるからとて無限の自由があるわけでない。或一つの文章には何人が解釋しても變らない意味があり心持がある。従つて之を音聲によつて表現する時、各個人の勝手次第に餘りに變つた妙な聲を出せば、誰が聴いても原文に含まれた意味や心持を良く表現したものだとは思はないであらう。原文の意味や心持が略、一定してゐる以上は之を表す音聲の切り方、速さ、抑揚調子が決して個人によつて甚しく異なる筈は無い。誰が朗讀しても誰が聴いても良い表現と良くない表現との區別の判定は略、一致する筈である。しかし又一方から云へば、一つの文章に於て甲の人は「前後の關係上自分は斯く解釋する」といひ、乙の人は「此の場合自分は此處で切つて讀んだ方が良いと思ふ、此の位の速さで讀み此の語句を強めて云つた方が良いと思ふ」といふ如き、僅かのちがひを生ずることがある。かゝる僅か

な相違は許さるべきである。〔甲〕に入れた發音とアクセントの様な嚴重な規範とは多少性質を異にするものと考へてよい。本書には〔乙〕に入れた箇條につき、著者の考で成るべく總ての人の考と一致するであらうと思はれる點を述べたのであるが、此の外に讀者各個人の考により前記多少の相違をも認めることを承知して置いていたゞきたい。

左に各項を解説する。

〔甲〕 (イ) 發音

原讀本の本文を全部發音通りに主として片假名で表記する。本書の假名は「發音符號」の一種である。現行の假名文字は實際の發音と一致しない點があるので、左の如き特別な符號を使ふ。

ガ ギ グ ゲ ゴ

これは鼻にかゝる子音(所謂略の音)を含むものを表す。例 ヒガ(日が)

つ

促音を表す。例 アツつと(熱ツと)〔ツは通常のtsuを表す。〕

ン

詳しくいへば各單語により n m 略等の別々の音で發音するが今は一括してンを使ふ。又オンマ(原讀本三十五頁)『オウマ』は omma と發音するのでンを使ふ。

△ヒ カリ ハジ メ マ シ タ

その他符號の左側の△は母音の無聲化することを示す。文の終に来るアリマスのス等も多くの場合母音が無聲化するが、特にはつきり發音しようとする時無聲化しないこともある。本書ではかゝるアリマス等に△を附けないでおく。又、二つの單語の連結する時例へばハヤクコイ(早く來い、讀本六十頁)のクの様にも母音の無聲化することがある。之も必ずしも常にさうなるとは限らないので、本書には△の符號を附けないでおく。

ズヅとジヂ

『ズ』と『ヅ』とは現代の東京語で同じ發音を表す。『ジ』と『ヂ』とも同様區別が無い。故に本書ではその一方の假名を採用し、ズ、ジを以て之を表す。

(ロ) アクセント

ヤマ | ウ | ミ | ダ | シ | マ | シ | タ

右の様に假名符號の右側に縦線を附けたのは、その音節の母音が同じ單語の他の音よりも比較的高い調子で發音される慣習が定まつてゐることを示す。所謂「起伏式アクセント」はこれである。

カオ(顔) マルイ(丸)

右の様に右側に縦線の無いのは所謂「平板式アクセント」を示す。即ち此の單語で起伏式の様子に某音節の母音が他よりも高く發音される慣習の無いことを示す。

〔乙〕 (イ) 斷 續

本書では假名符號を以て

ムコオノ ヤマニ

の様に各單語を離して表記するが、是は實際朗讀する時必ず聲を切るといふ意味ではない。寧ろ發音(殊にアクセント)を表記する必要上各々の單語を分けて示すだけである。但し此の單語もやはり元は音聲の切れ目によつて定まるも

のである。即ち多くの實地の言葉において澤山の實例を総合し、同時に前後に聲の切れ目を附ける最小限度の一續きを取り出し、之を單語と名づけたものである。故に次に記す斷續において聲を切る時は常に單語の終で切ることになる。

聲を續けていふ時は一つの單語と次の單語との間に聲の切れ目は全く無いのである。

本書の表記には、各特殊の文章に於て各特殊の意味や心持を表現するため、聲の斷續の一例を次の符號によつて附記する。

〔注意〕 左記は本書第一卷に記した所と少しちがふ。

一 聲を切る符號

＝ 聲を切る符號 但し多くは文章の終(。點を書く處)に當る。多くは稍長く間を置くことになる。

＝ | 休止の符號 「間」といふよりは「休止」と名づける方が適當である。稍長い間を示す。

但しこれらの符號によつて示す切り方休止のしかたは〔乙〕として述べる主意に

従ひ必ずしも嚴格に定めることが出来ない。

斷續隨意

といふ語を用ひて述べた處がある。切るか切らないかいづれでも意味の表現上大して影響が無い處を示す。又符號を附けた處でも、聲を切つて間を置く長さは各文章により朗讀する各個人の考へにより多少ちがひがあつて良い。

> 人の言葉の終

例 ヤア オツキサマが デタ>ト ユウ

人の言葉を自然の調子でいふ時「ト」に移る堺で一寸聲を切る方が言ひ易い。但し「ト」は所謂テニヲハの一つで常に上の語につゞけて發音するのが原則である。此の性質を示すため一此の横線と區別して>を使ふ。

(口) 速度

(ハ) 抑揚調子

これは一々本文の次に記した。

以上の外詳しい説明は本書卷一の序説及び

神保格著 話言葉の研究と實際

を参考していただきたい。

又原讀本朗讀の一例はコロムビア教育レコードの中にある。

シ
ョ
オ
ガ
ク

コ
ク
ゴ
ド
ク
ホ
ン
マ
キ
ノ
ニ
ジ
ン
ジ
ョ
オ
カ
ヨ
オ
モ
ン
ブ
シ
ョ
オ

一頁

イチ | ヤマノ | ウエ |

二頁

ムコオノ | ヤマニ | ノボッタラ | ヤマノ

ムコオワ | ムラダッタ | タンボノ | ツズク

ムラダッタ | ツズク | タンボノ | ソノ

サキワ | ヒロイ | ヒロイ | ウミダッタ

アオイ | アオイ | ウミダッタ | チイサイ

シラホガ | フタツミツ | アオイ | ウミニ

ウイテイタ | トオクノ | ホオニ | ウイテイタ

[甲] (イ) 發音 ウイテイタ、俗語でウイテエタ、更に短くしてウイテタとい

ふことがある。こゝはウイテイタといふべきである。

- (ロ) アクセント ヤマノ(平)、單獨にいふヤマ及び他のテニヲハの附くヤマニ、ヤマワ等は起伏式である。ノの附く例に限つて平板式にいふ。ヒロイ、比較、ヒロク。ウミ、比較、ウミ「濃」。アオイ、比較、アオク。チイサイ、比較、チイサク。フタツミツ、別々にはフタツ、ミツツ。ウイテイタ、別々にはウイテ(平) イタ(平)。トオクノ ホオニ、屢、續けてトオクノホオニの如くいふ。

[乙]

- (イ) 斷續 本文符號の通り。ヒロイヒロイの間、アオイアオイの間は切らない方がよい。

速度 通常

- (ハ) 抑揚調子 始めのムラダッタを強める。次はタンボノ ツズクを強め、ムラダッタは強めない。同じ單語ムラダッタを二回とも同じ強さでいふのは單調になるのみならず、次のムラダッタを強めない事が對比によつてタンボノツズクを強めることになるからである。ヒロイヒロイとウミとを強める。次のウミダッタは強めない(理由は上記と同じ)。

は上記に同じ。ヒロイヒロイ、アオイアオイ、二回繰返す。第二のヒロイとアオイの方を比較的一層強める方がよいであらう。シラホを強める。チイサイとフタツミツとを餘り強め過ぎるのは良くない。トオクノホオニを強める。二度目のウイテイタは強めない(理由は上記に同じ)。調子、特に尻上りの調子を使ふべき箇處は無い。

ニ オツキサマ

ヒガ クレマシタ ソラデワ オホシサマガ

ヒカリハジメマシタ ムコオノ モリノ

ウエガ アカルク ナリマシタ ニワノ

ススキガ オイデオイデオ シテ イマス

オツキサマガ カオオ ダシマシタ

生 結語の終り

ド|コカデ ヤア オツキサマが デタ>ト
 ユウ コエガ シマシタ| オツキサマワ
 スつカリ モリノ ウエニ アガリマシタ
 マルイ マルイ オツキサマデス| アカルイ
 アカルイ オツキサマデス| クサノ
 ナカデワ コオロギガ ナイテ イマス

[甲] (イ) 發音 オホシサマ、日常の言葉でシの母音が屢々無聲化する。こゝは發音を明瞭にするため成るべく無聲化させない方がよい。ススキの始めのヌも同様の傾向がある。これも成るべく無聲化させない方がよい。ド|コカデ、俗語でド|つかデといふ。こゝはド|コカデと發音すべきである。

(ロ) アクセント オツキサマ、此の型が江戸時代からの傳統的アクセント

である。他の地方のオツキサマの様な型に従ふべき理由は無い。オホシサマは此の型である。お月様のアクセントとはちがふ。ニワノ(平)、比較、ニワノは「二羽」の意になる。ヤア、平板式の如くにいふ。

[乙] (イ)

斷續 本文の符號に示した外、原文の讀點(、)の處で必ず切ると限らない。モリノウエガの次は切らない方がよい。ススキガの次は斷續隨意。オイデオイデオ シテ イマスの次は意味から云つて一段落をなすので休止を置く。お月様が顔を出す迄に多少の時間を要する心を含める。『オツキサマガ、カホヲ』の間は切らない方がよい。ヤアの次も切らない方がよい。コエガ シマシタの次は休止。『オ月サマハ、スツカリ』の間は斷續隨意。マルイマルイの間、アカルイアカルイの間は切らない方がよい。クサノナカデワの次は斷續隨意。

(ロ) 速度 全體として靜かな夕暮の景色を描く心でやゝ遅い速度が適する。「ヤア、オツキサマガ デタ」といふ言葉の所だけは稍速く云つ

てよい。

(ハ) 抑揚調子 オイデオイデオを稍強める。ヤアは平板式アクセントの様に平な調子の方がよい。ヤを上げアを下げるのは良くない。『オ月サマガ』を強める。『デタ』を強めるのは良くない。『コエガ』を餘り強めない様注意。『スツカリ』と『森の上に』とを強める。特に『スツカリ』の方を強めるが良い。マルイマルイ、アカルイアカルイ、いづれも二度目のマルイ、アカルイの方を特に強くいふ方がよい。『クサノ中デハ』以下は稍聲を弱くいふ方が面白い。こほろぎの静かな鳴聲を思はせる心である。

七頁

サン アシタワ エンソク

ヒルスキカラ ソラガ クモッテ キマシタ
 アシタワ ガッコオノ エンソクデス

八頁

九頁

タロオサンワ テンキガ シンバイデ
 タマリマセン ソトエ デテ ソラバカリ
 ミテ イマス ソノウチ タロオサンワ
 ソオダト イッテ ウチエ カケコミマシタ
 タロオサンワ カミデ テルテルボオズオ
 ツクリマシタ ソレオ ニワノ キノ エダニ
 ツルシテ テルテルボオズ テルボオズ
 アシタ テンキニ シテ オクレト
 ウタイマシタ ケレドモ クモワ ダンダン
 フェテ キマシタ アタリガ ウスグラク

元ハカリ
 ハカリ
 ハカリ

オッ シャイマシタ

〔甲〕

(イ) 發音 トオトオ、これをトウと發音してはいけない。ナキダシソオ
 デス、シの母音が屢、無聲化する。こゝは發音を明瞭にするため、成る
 べく無聲化しない様にいふ方がよい。スコシタツテカラ、續けてい
 ふ時スコシのシの母音が屢、無聲化する。トケエヤ、此の様な日常頻
 繁に使はれる語は決してトケイの様にはない。ウレシクテ、日常
 の速い言葉ではシクと二つとも母音無聲化が行はれる。ゆつくり
 いふ時はクの方の母音が無聲化しない。こゝは後者に従ふがよい。

(ロ) アクセント クモツテキマシタ、續けていふ時キマシタのアクセ
 ントが餘り高くなならない。ソラバカリ、こゝはバカリを強めるためバ
 を高くいつてよい。ミテイマス、續けていふ時イマスのアクセント
 が餘り高くなならない。フエテ、比較、フエル、フエタ。ナイテイマス、續
 けていふ時此の型の様になる。スコシタツテカラ、續けていふ時タ
 ッテカラのアクセントが餘り高くなならない。ダシニイキマシタ、續

〔乙〕

(イ) 斷續 『空ガクモツテキマシタ。』の次、原文では行を改めてあるが、
 『然るに明日は遠足である』といふ心を入れて解釋するならば、クモ
 ッテキマシタの次に休止(=)を置かない方がよい。ソノウチの
 前は少し休止を置く。太郎が「どうしようか」と何か考へて居る心を
 表す。カケコミマシタの次に休止を置く。之を聽く人に何だらう
 ならない。

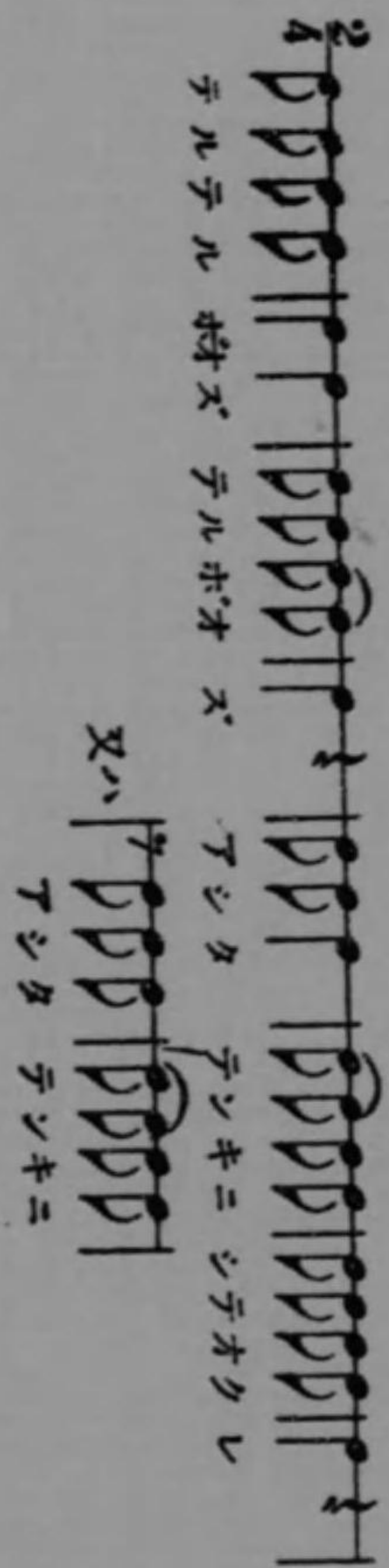
けていふ時イキマシタのアクセントが餘り高くなならない。フツテ、
 比較、フル、フラナイ、フツタ。フツテはフの母音が無聲化するため、ア
 クセントの高い部分が「……」の方に移る。カサオ、参考、カサオ「嵩を」。
 ラジオ、今日或人々はラジオといふ。斯様な新しい語は慣用が固定
 するまで人々は色々な型を試みるのでアクセントも動搖する。今
 はラジオの型が多く用ひられる様に思はれるので、此處では之を採
 用する。キコエテキマシタ、續けていふ時此の型の様になる。コン
 ヤノウチニ、續けていふ時、全部を平板式にいふこともある。オテン
 キダソオデス、多くは續けていふ、アクセントはソオデスのソが高く
 ならない。

と考へさせる効果がある。従つて『サウダ』といふ言葉を先に出した表現が生きて来る。ウスグラクナリマシタの次の休止は天候次第に悪化して行く有様を思はせるためである。スコシ タツテカラの前は休止する。「少したつてから」だからである。イイツカッテの次断續隨意。『太郎サンハ、ウレシクテ……』から『ラデオガ サウイヒマシタヨ。』トイヒマスト迄は殆ど休止を置かぬ位がよい。始めの悄然たる有様とは正反對に喜び勇んで急ぐ心を示す。

(ロ) 速度 ソオダといふ太郎の言葉は稍速くいふ。カケコミマシタも多少速くいふと面白いであらう。アタリガウスグラクナリマシタ、多少遅くいふのもよいであらう。『雨ガフツテツマラナイナア』といふ太郎の言葉もゆつくりいふ方がよい。後の『オカアサン、アシタハ……』といふ言葉全體は稍速くいふ。之に對照して母親の言葉は喜びを表してゐるが、稍ゆつくりいふ方がよい。そのために前の太郎の喜びの言葉が一層引立つであらう。

(ハ) 抑揚調子 此の課全體は成る可く自然な日常の談話に近くいふ方がよい。

クモツテを強める。エンソクを強める。タマリマセンを強める。『空バカリ』のバカリを強めるのも面白いであらう。『サウダ』は稍早くいふと共に強くいふ。カミデは餘り強めない。テルポオズオの方を強める。太郎の歌つた言葉は



がよい。クモツテを強める。エンソクを強める。タマリマセンを強める。『空バカリ』のバカリを強めるのも面白いであらう。『サウダ』は稍早くいふと共に強くいふ。カミデは餘り強めない。テルポオズオの方を強める。太郎の歌つた言葉は

するのが良い。(將來アナウンサーの天氣豫報の調子が改良され、ば別問題である。)この事務的な機械的な無表情なアナウンサーの聲が太郎には實に嬉しく響いたのである。後の太郎の喜び勇む調子と對照させていふが良い。オカアサンと呼掛ける聲は尻上りでも尻下りでもよいが、寧ろ尻下りにして勢よくいふ方が面白いであらう。イイマシタヨの終は尻上りでなければならぬ。母親の言葉は婦人の言葉として調子の上下を稍多く附ける方が適當である。マアと語尾を下げ、ヨカッタのヨを高く且強くいふ。ネは一べん上げて直ぐ終を下げる、従つてネの音は多少延長してもよい。ヨカッタネの方を強める。マアの方を強め過ぎると、それで「先づ安心」といふ様な意味に聞える。此處はさういふ意味でない。マアは「先づ」の意でなく單に強めの感動詞である。

『デハ、オイシイオベンタウヲ』云々。こゝで「明日好天氣ならば美味な辨當を作るのか、然らば惡天氣ならばまづい辨當を作るつもりなのか」等と無益な理窟をこねてはいけない。愛する我が子の喜ぶの

を見て共に喜ぶ母親の慈愛がオイシイといふ語に表れてゐるのである。その心を聲の調子に十分表すべきである。アゲマシヨオの終は尻上りにしてもよい。

シ　カマキリジイサン

カマキリジイサン　イネカリニ　カマオ
 カツイデ　アゼミチオ　トオイ　タンボエ
 イソギマス　スツキリ　ハレタ　アキノ　ヒニ
 トオイ　タンボエ　イソギマス

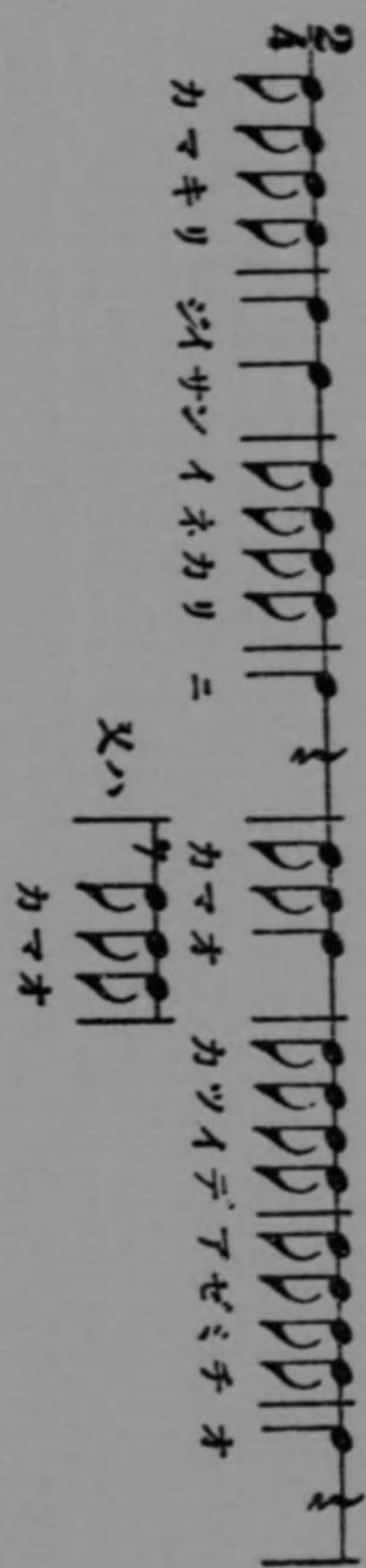
[甲] (イ) 發音 云ふべきこと無し。

(ロ) アクセント カマキリ、單獨には此の型である。イネ、單獨には此の型である。カル(平)刈。カマ鎌。參考、カマ(平)釜。イソギマス、比較、イ

[乙]

ソグ。ハレタ「晴」 参考、ハレタ(平)「腫」。
(イ) 断續 所謂七五調二行の繰返しであるが、その通りいふと單調になる。之を破るため、イネカリニの次で切り、カマオからイソギマス迄の四行を續ける。終りの四行も續ける。

(ロ) 速度 通常
(ハ) 抑揚調子 七五調のリズムをよく解しない兒童がもし有れば、一度は



の様なりズムを明かに聴かせることが必要であらうが、完成された良い朗讀に於ては、リズムをこんな露骨にいふのは面白くない。自然の談話の抑揚調子にいふ方がよい。

ゴ サルト カニ

アルヒ サルト カニガ ヤマエ アソビニ

イキマシタ サルワ カキノタネオ

ヒロイマシタ カニワ ニギリメシオ

ヒロイマシタ サルワ ニギリメシガ

ホシク ナリマシタ カニニ タノンデ

カキノタネト トリカエテ モライマシタ

ソオシテ オイシソオニ タベテ シマイマシタ

カニワ ウチエ カエツテ カキノタネオ

十九頁

二十頁

ニワニ マキマシタ ソオシテ ハヤク メオ
 ダセ ハヤク メオ ダセト イイマシタ
 メガ デマシタ ハヤク キニ ナレ ハヤク
 キニ ナレト イイマシタ | キニ
 ナリマシタ ハヤク ミガ ナレ ハヤク
 ミガ ナレト イイマシタ オオキナ
 カキガ タクサン ナリマシタ | カニガ
 シタカラ ナガメテ イマスト サルガ
 アソビニ キマシタ ボクガ トつテ
 ヤロオト イつテ スルスルト キニ

二十一頁

二十二頁

二十三頁

二十四頁

ノボリマシタ ナガイ テオ ノバシテ
 オイシイ カキオ イクツモ イクツモ
 モギトリマシタ ソオシテ ジブンバカリ
 タベテ カニニワ ヒトツモ
 ヤリマセンデシタ シマイニ アオイ カキオ
 カニニ ナゲツケテ イつテ シマイマシタ
 カニワ オオケガオ シテ ナキマシタ |
 ソコエ ハチガ アソビニ キマシタ ナク
 ワケオ キイテ タイソオ オコリマシタ |
 ウスガ キマシタ ウスモ タイソオ

二十五頁

オコリマシタ[△] クリガ キマシタ[△] クリモ
 タイソオ オコリマシタ[△] ミンナデ
 ソオダンシテ[△] サルオ コラス コトニ
 シマシタ[△] サルオ ヨビニ ヤリマシタ[△]
 サルワ マタ カキガ タベラレルト
 オモつテ ヨロコンデ カニノ ウチエ
 キマシタ[△] サルガ ヒバチノ マエニ
 スワリマシタ[△] ハイノ ナカニ カクレテ
 イタ クリワ[△] サルニ ポント
 トビツキマシタ[△] サルワ アツつト

二十六頁

二十七頁

イイナガラ[△] ダイドコロエ[△] ミズオ カケニ
 イキマシタ[△] マチカマエテ イタ ハチワ
 チクリト[△] サルノ カオオ サシマシタ[△]
 イタイ イタイ[△] ナキナガラ[△] サルワ
 トグチノ ホオエ ニゲマシタ[△] ウスガ
 ウエカラ ドシント[△] オチテ[△] キテ[△] サルオ
 オサエツケマシタ[△] ソコエ カニガ
 キマシタ[△] ハチモ キマシタ[△] クリモ
 キマシタ[△] カニワ[△] ハサミデ[△] サルノ クビオ
 キロオト[△] シマシタ[△] サルワ[△] トオトオ

二十八頁

二十九頁

ジブンガ ワルカッタト アヤマリマシタ
 カニワ ユルシテ ヤリマシタ

[甲]

(イ) 發音 オイシソオニ、通常の言葉ではシの母音が屢、無聲化する。こゝは發音を明瞭にするため、成るべく無聲化しない方がよい。コラスコトニ、續けていふ時スの母音が無聲化する。アツット、速くいふ時ツの母音が屢、無聲化する。

(ロ) アクセント カキノタネ、別々にはカキノ(平)タネ。ホシク、比較、ホシイ。タベテ、比較、タベル。タベテシマイマシタ、續けていふ時、シマイマシタのアクセントが餘り高くない。ニワニ、参考、ニワ「二羽」。マキマシタ、比較、マク「詩」。参考、マク(平)「卷」。ハヤク、比較、ハヤイ。メオ「芽」「眼」共に同じアクセントである。キニ ナリマシタ、参考、キニナリマシタ「氣になりました」。オオキナ、比較、オオキイ、オオキク。タクサン、多量「多數」の意。比較、タクサン、十分、もう是以上不要の意。ナリ

マシタ、比較、ナル「生」。参考、ナル(平)「鳴」。鳴りましたはやはりナリマシタである。ボクガ、ボクガと平板式にいふ人もある。イクツモ、又はイクツモといふ人もある。「何箇」といふ疑問の意の時は常にイクツモといふ。タベテ、比較、タベル。ヒトツモ、少しも「の意の時は平板式である。「一箇」といふ名詞(所謂數詞)の時はヒトツである。イツテシマイマシタ、續けていふ時此の型の様になる。ハチ、参考、ハチ「八」「鉢」。タインオ、参考、タインオ(平)「體操」。クリ、参考、クリ「九里」。コラスコトニ、續けていふ時、コトニのアクセントが高くない。マタ、再び「の意の時は常に平板式である。演説などで、接續詞的に使ふ時、マタといふことが多い。参考、マタ「股」。ヒバチ、又はヒバチ、此の二様の型が同様によく用ひられる。ポント、アクセント不定。アツつと、比較、アツイ、参考、アツイ(平)「厚」。カケニ、比較、カケル、掛「懸」、馳「皆同じ型である。「缺」の意の時はカケルと平板式である。マチカマエテイタ、續けていふ時、マチカマエテイタ、又はマチカマエテイタといふことがある。オチテ、比較、オチル。ワルカッタ、比較、ワルイ、ワルク。

〔乙〕

(1) 断續 本文の符號で示した切り方休み方が適當である。句讀點と必ずしも一致しないこと注意。例へば原文カキノタネトの次に點があるが切らない方がよい。

原文 「早ク メ ヲ 出セ、 早ク メ ヲ 出セ。」

ト イヒマシタ。

メガ 出マシタ。

此の間の休止は、原文の解釋如何により二様にすることが出来る。

(一) 『メガ出マシタ』の次で休止。これは「芽を出せ」といふ希望に應じて出た」といふ心。(二) 『トイヒマシタ』の次で休止。これは芽が出る
と直に次の希望が起ることを示す。次の『木ニナリマシタ』の前で
休止するのもこれと同様、木になると直に又次の新たな希望が起るこ
とを示す。著者個人としては(二)の方を探つた。ダイドコロエの次
で一寸切る方がよい。もし続けると「臺所に水を掛ける」といふ意味
に聞える。従つてその前の『イヒナガラ』の次でも切ることが必要
である。猿が火鉢の前に坐る所から白が落ちて来る所まで、殆ど休

止を置かすにいふ方がよい。猿にとつて思ひがけない出来事が後
から後から息もつがせず續々と起つて来る有様を示す。

(ロ) 速度 全體がかなり長い文である。之を朗讀するに急ぎ過ぎない
様注意することが必要であらう。猿が火鉢の前に坐つてから續々
と起る不意の出来事も、必ずしも速くいふを要しない。前に述べた
通り、休止を置かないことによつて急迫した心を十分に表すことが
出来るであらう。

(ハ) 抑揚調子 始めから三行目のカキノタネオと次のニギリメシオと
を強めること勿論である。此の類に屬する例は他に澤山ある。一
々記さない。ナガイ テオ ノバシテのナガイを餘り強め過ぎな
い様に注意。強め過ぎると、短い方の手は延ばさなかつた」様に聞
えて宜しくない。イクツモは二度とも特に強める。『大ケガラシテ、
泣キマシタ』のナキマシタを強めること注意。『ウスモ大ソウ』の
ウスモと次のクリモとを強める。アツツトといふ言葉は急激に強
めることを要する。イタイイタイも感情の表れる様な調子を使ふ。

ドシントを強める。

ロク カラスヨ イソゲ

三十頁

三十一頁

ユウヤケ コヤケ カラスガ カエル

カラスヨ イソゲ イソイデ カエレ

オミヤノ モリモ オテラノ モリモ

ユウヤケ コヤケデ マツカニ ヤケル

オマエノ ヤドガ マツカニ ヤケル

カラスヨ イソゲ イソイデ カヘレ

[甲]

- (イ) 發音 云ふべきこと無し。
- (ロ) アクセント 云ふべきこと無し。

[乙]

(イ) 斷續 一行毎にその終りで同じ様に切つていふと甚しく單調になる。本文表記の様に休止(—|—)を置くことにより、單調を破ることが出来るであらう。

(ロ) 速度 通常。特に緩急の變化を附けるべき處は無い。

(ハ) 抑揚調子 ユウヤケ コヤケ カラスガ カエル。この符號)で示す様な抑揚の「山」が各行に二つづつ起る。此の點をはつきりいふ方が此の文としては却つて面白いであらう。但し日常の談話の調子を成るべく失はない様に氣を附けることは必要である。

シチ ケンチャン

三十二頁

オカアサシテ サイホオオ シテ

イラッシャイマシタ ケンチャンガ ソバエ

イツテ イタズラオ シマシタ オカアサシテ

三十三頁

シチ・ケンチャン

トシコチャン— チョット ケンチャンオ
 ツレテ ワンワン ミニ イつテ
 チョオダイ>ト オつシャイマシタ—
 ワタクシワ ケンチャンオ ツレテ ソトエ
 デマシタ[△] ワタクシワ オトナリノ マエエ
 イつテ[△] ポチ[△] ポチ>ト ヨビマシタ[△]ガ
 ポチワ イマセンデシタ[△] ツトムサンノ
 オウチノ マエニ[△] ンマガ イマシタ[△]
 ケンチャンガ[△] オンマ オンマ>ト
 イイマシタ[△] ンマワ[△] オケノ ナカエ カオオ

イレテ カイバオ タベテ イマシタ[△]
 タベナガラ トキドキ シつ[△]ポオ[△]フッテ
 イマシタ[△] ケンチャンワ ニコニコシテ ミテ
 イマシタ[△]

〔甲〕 (イ) 發音 ンマ、通常の言葉における發音は *mma* である。或教師や兒童は假名文字ウマに従つて *uma* と發音しようとする。しかし屢々繰返すのを注意して聴くと必ず或場合に *mma* と發音してゐることを發見する。それ程 *mma* といふ音は自然に出るのである。殊に幼兒の「オウマ」といふ語は決してウを發音しない、必ず *omma* である。オウチ、通常の言葉で多くオオチといふ。こゝは假名通りオウチといつた方がよい。

(ロ) アクセント チョット、多くは平板式である。時としてチョットとい

ふこともある。△ツトムサン、斯様な人名のアクセントは各家庭で多少習慣を異にする。平板式か又は△ツトムサンのいづれかである。オンマ、オが附けば必ず平板式である。タベテ、比較、タベル。タベテイマシタ、ミ、テイマシタ、いづれも續けていふ時イマシタのアクセントが餘り高くない。△フツテイマシタ、續けていふ時此の型の様になる。参考、「降つて居ました」は△フツテイマシタである。「降る」はフルである。

[乙]

(イ) 斷續 ケンチャンガ ソバエ イツテはもし切るならばケンチャンガの次で切る方がよい。ワタクシワ ケンチャンオ ツレテ、これももし切るならばワタクシワの次で切る方がよい。

(ロ) 速度 通常。特に速度の變化を附けるべき處は無い。

(ハ) 抑揚調子 母の言葉トシコチャンは尻上りにいふ。此の方が語氣が柔かだからである。ワンワンを強める。チョオダイの終は尻下りでも尻上りでもよい。下げれば命令の心持が稍強く聞える。イマセンデシタを強める。ンマ を強める。ニコニコシテを強める。

ハチ ワタシノ ニンギョオ

ワタシノ ニンギョワ カワイイ

ニンギョ ワタシガ ウタオ ウタツテ

ヤルト イツモ ニコニコ ワライマス

ワタシノ ニンギョワ カワイイ

ニンギョ ワタシガ ドンナニ オコツテ

イテモ ヤツパリ ニコニコ ワラツテ

イマス

三十七頁

三十八頁

[甲]

(イ) 發音 ニンギョオ、原文の假名通り發音すればギョオと長い母音を使ひ、四音節の單語となる。しかし此の韻文の八七、七七、七五の音節リズムに合せるにはギョを短くして一音節としニンギョは三音節にいはないと合はない。こゝは假名遣に拘泥せずについて良い。

(ロ) アクセント ワラッテイマス、續けていふ時此の型の様になる。

(イ) 斷續 本文表記の通りでよい。

(ロ) 速度 通常

(ハ) 抑揚調子 韻文のリズムを明かにいつてよいが、一方、日常談話の抑揚調子に成るべく近くいふことを忘れてはいけない。カワイイを強める。ウタオを強める。ドンナニを強める。ヤッバリを強める。

[乙]

ク ニンギョオノ ビョオキ

ハナコサンワ ニンギョオガ ビョオキニ

三十九頁

ナツタノデ オイシャサマオ ヨビマシタ

オイシャサマワ マサオサンデス オトナノ

ボオシオ カブツテ オオキナ カバンオ

モツテ ハイッテ キマシタ ゴビョオニンワ

ドチラデスカ アチラニ ネテ オリマス

ハナコサンワ マサオサンオ オクエ

トオシマシタ マサオサンワ ニンギョオノ

ソバニ スワリマシタ マサオサンワ

ニンギョオノ テオ トリマシタ ソレカラ

ヒタイニ サワツテ ミマシタ オナカオ

四十頁

四十一頁

四十二頁

ウエカラ オサエテ ミマシタ マサオサンガ
 アンマリ ジョオズニ オイシャサマノ
 マネオ スルノデ ハナコサンワ キユウニ
 オカシク ナリマシタ デモ ワラワナイデ
 ジット ガマンシテ イマシタ マサオサンワ
 テエネエニ ミテカラ タイシテ ワルクワ
 ナイ ヨオデス タベスキデスネト
 マジメナ カオオ シテ イイマシタ
 ハナコサンワ トオトオ ワライダシマシタ
 マサオサンモ ワライダシマシタ

四十三頁

[甲]

(イ) 發音 ニンギョオ、こゝは韻文でないからギョオと長くいふ。テエネ
 エ、これも日常頻繁に使ふ語でテイネイとはいはない。
 (ロ) アクセント オイシャサマ、比較、イシャ(平)。ハイつテキマシタ、続け
 ていふ時、キマシタのアクセントが餘り高くなる。ゴビョオニ
 ン、比較、ビョオニン(平)。オク「奥」億。参考、オク「置」。トオシマシタ、比較、
 トオス。ソバ「傍」蕎麥もソバ。サワつテミマシタ、続けていふ時此の
 型の様になる。オサエテミマシタ、続けていふ時ミマシタのアクセ
 ントが餘り高くなる。オカシク、比較、オカシイ。ナイヨオデス、
 殆ど常に續けて上記の型でいふ。

[乙]

(イ) 斷續 此の課は特に長い休止を置くべき處が無い。強ひて求めれ
 ば四十頁の終ニンギョオノ ソバニ スワリマシタの次、及びジツ
 ト ガマンシテ イマシタの次に休止を置いてよい。オイシャサ
 マワ マサオサンデスの間は切らない方がよい。ボオシオ カブ
 っテの次は切つた方がよい。アンマリ ジョオズニの次は切つて
 はいけない。もし切るならば其の前のマサオサンガの次で切る。

デモの次で切るならば切る。ワラワナイデの次は断續隨意。マジメナカオオシテの次も切らない方がよい。

(ロ) 速度 醫者の言葉は「まじめな顔をして」勿體ぶつてゐることを示すため、稍ゆつくり云ふ方が面白い。人形の手を執り、額にさはり、腹をおさへるあたりも、ゆつくりいふ方が勿體ぶつた醫者の動作を示すに適當である。

(ハ) 抑揚調子 オイシャサマオ(三十八頁終の行)を強める。マサオサンデスを強める。ドチラを強める。ドチラデスカの終は尻上りにいふ。アチラニを強める。アンマリ ジョオズニを共に強める。キユウニ オカシクを共に強める。ジット ガマンを共に強める。タイシテを強める。タベスギデスネの終は尻上りにする。トオトオを強める。

ジュウ ネズミノ ヨメリ

ネズミノ アカチャンガ ンマレマシタ
 ダンダン オオキク ナツテ ヨイ ムスメニ
 ナリマシタ オトオサンモ オカアサンモ
 オオヨロコビデ ホントオニ ヨイ コダ
 コンナ ヨイ コオ ネズミノ オヨメサンニ
 スルノワ オシイ セカイジュウデ イチバン
 エライ ヒトノ オヨメサンニ シタイ
 カンガエマシタ オトオサント
 オカアサンワ ソオダンシテ オヒサマノ
 トコロエ オヨメニ アゲル コトニ

四十七頁

シマシタ[△] | オトオサンワ | オヒサマノ
 トコロエ | イツテ | ワタクシノ | ウチニ
 タイヘン | ヨイ | ムスメガ | アリマス[△]
 セカイジユウデ | イチバン | エライ | ヒトノ
 トコロエ | アゲタイト | オモイマス[△] | イチバン
 エライ | ヒトワ | アナタデス[△] | ドオカ
 ワタクシノ | ムスメチ | モラッテ
 クダサイ[△] | タノミマシタ[△] | オヒサマワ[△]
 アリガタイガ | オコトワリ | シマシヨオ[△]
 セカイジユウニワ | ワタクシヨリ | モット

四十八頁

四十九頁

五十頁

エライ | ヒトガ | イマスカラ[△] > ト
 オツシャイマシタ[△] | ネズミノ | オトオサンワ
 ビックリシテ[△] | ソレワ | ダレデスカ[△] > ト
 タズネマシタ[△] | オヒサマワ | ソレワ
 クモサデス[△] | イクラ | ワタクシガ | テッテ
 イテモ | クモサング | クルト | カクサレテ
 シマイマス[△] | クモサンニワ | カナイマセン[△] > ト
 イイマシタ[△] | ネズミノ | オトオサンワ
 クモノ | トコロエ | イツテ | セカイジユウデ
 イチバン | エライ | アナタニ | ムスメオ

五十一頁

アゲタイト オモイマス>ト イイマシタ

クモモ コトワリマシタ ソオシテ

セカイジュウニワ ワタクシヨリ モット

エライ ヒトガ イマスカラ>ト イイマシタ

ネズミノ オトオサンワ ビツクリシテ

ソレワ ダレデスカ>ト タズネマシタ

クモワ ソレワ カゼサンデス イクラ

ワタクシガ ソラニ イバツテ イテモ

カゼサンガ クルト フキトバサレテ

五十三頁

シマイマス カゼサンニワ カナイマセン>ト

五十四頁

イイマシタ ネズミノ オトオサンワ

カゼノ トコロエ イツテ セカイジュウデ

イチバン エライ アナタニ ムスメオ

アゲタイト オモイマス>ト イイマシタ

カゼモ コトワリマシタ ソオシテ

セカイジュウニワ ワタクシヨリ モット

エライ ヒトガ イマスカラ>ト イイマシタ

ネズミノ オトオサンワ ソレワ

ダレデスカ>ト タズネマシタ カゼワ

ソレワ カベサンデス イクラ ワタクシガ

五十五頁

五十六頁

イツ ショ オケンメエニ ナッテ フイテモ
 カベサンワ ヘエキデ イマス カベサンニワ
 カナイマセント イイマシタ[△] ネズミノ
 オトオサンワ カベノ トコロエ イッテ
 セカイジュウデ イチバン エライ アナタニ
 ムスメオ アゲタイト オモイマス[△]ト
 イイマシタ[△] カベモ コトワリマシタ[△]
 ソオシテ[△] セカイジュウニワ ワタクシヨリ
 モット エライ ヒトガ イマスカラ[△]ト
 イイマシタ[△] ネズミノ オトオサンワ ソレワ

五十七頁

五十八頁

五十九頁

ダレデスカ[△]ト タズネマシタ[△] カベワ ソレワ
 ネズミサンデス[△] ネズミサンニ ガリガリト
 カジラレテワ タマリマセン[△]ト イイマシタ[△]
 ネズミノ オトオサンワ ナルホド
 セカイジュウデ イチバン エライノワ
 ネズミダ[△]ト オモイマシタ[△] ソオシテ[△]
 ムスメオ キンジョノ ネズミノ
 オヨメサンニ シマシタ[△]

六十頁

[甲]

(イ) 發音 ンマレマシタ、始めの音は *nnare* といふのが通常である。ヘ
 エキ(五十六頁)之も日常使ふ語で、ヘイキとはいはない。ガリガリ(五

十八頁、こゝは二つとも鼻にかからないガを發音する。

(ロ) アクセント イチバン、最も「意の時は平板式である。順序の第一番の意の時はイチバンである。アゲル コトニ、續けていふ時アゲルコトニ、又はアゲルコトニといふことがある。ウチニ、「家に」の意の時此の型である。「内部に」の意の時平板式にいふ。こゝは前者である。クモ、雲、蜘蛛もクモ。フイテモ、吹」。参考、フイテモ、拭つても。カジラレテワ、比較、カジル。

[乙]

(イ) 斷續 オトオサント オカアサンワ ソオダンシテ、もし切るならばオトオサントの次で切つてもよし、オカアサンワの次で切つてもよい。セカイジュウデの次は切らない方がよい。

(ロ) 速度 通常。特に變化を附けるべき處は無い。

(ハ) 抑揚調子 ホントオニの方をヨイよりも稍強める方がよい。ヨイコダといふ事實が既にわかつてゐるからである。オシイを強める。イチバン エライを強める。ムスメガ(四十六頁)を強めることを忘れない様注意。アナタデスを特に強める。モットを強める。(以下

のモットも同じ。クモサンデスを強める。カクサレテを強める。カナイマセンを強める。アナタニ(五十頁、五十三頁、五十七頁、皆同じ)を強めることが大切である。フキトバサレテを強める。ヘエキデを強める。タマリマセンを強める。ネズミダ(五十九頁)を強める。

ジュウイチ オショオガツ

イクニチ タッタラ オショオガツ ハヤク

コイ オショオガツ タカイ ヤマ コエテ

ヒクイ ヤマ コエテ ハヤク コイ

オショオガツ アメガ フツテモ ユキガ

フツテモ ハヤク コイ オショオガツ

[甲]

(イ) 發音 云ふべきこと無し。

(ロ) アクセント タカイヤマ、ヒクイヤマ、續けていふ時ヤマのアクセントが餘り高くなならない。フツテモ、比較フル、參考フル(平)振。

[乙]

(イ) 斷續 本文表記の外特にいふべきこと無し。

(ロ) 速度 通常

(ハ) 抑揚調子 イクニチ タツタラ オシヨオガツ、終は尻下りでよい。

ジュウニ コブトリ

ミギノ ホオニ オオキナ コブノ アル
 オジイサンガ アリマシタ アルヒ ヤマデ
 キオ キツテ イルト アメガ ザアザア

フツテ キマシタ オジイサンワ キノ
 アナニ カクレテ アメノ ヤムノオ マツテ
 イマシタ オジイサンワ イツノマニカ
 ネムツテ シマイマシタ メガ サメタ
 トキワ モオ ヨルデ アメワ スツカリ
 ヤンデ イマシタ ミルト オジイサンノ
 カクレテ イル キノ マエニ タクサンノ
 オニガ アツマツテ イマシタ アオイ
 オニヤ アカイ オニガ タキビノ マワリデ
 オドリオ オドツテ イマシタ ドノ オニモ

六十五頁

タイシヨオノ オニニ オジギオ シテワ
 カワルガワル タツテ オドッテ イマシタ
 オジイサンワ タイソオ オドリガ
 スキデシタ ミテ イル ウチニ ジブンモ
 オドリタクテ タマラナク ナリマシタ
 オソロシイ コトモ ワスレテ キノ
 アナカラ トビダシマシタ オニワ ビツクリ
 シマシタ アレワ ナンダ アレワ
 ナンダト イイナガラ ワイワイ
 サワギマシタ オジイサンワ ソレニワ

六十六頁

六十七頁

六十八頁

六十九頁

カマワズ ウタオ ウタイナガラ
 イッショオケンメエニ オドリマシタ オニワ
 コレワ オモシロイ コレワ オモシロイト
 イッテ テオ タタイテ ホメマシタ
 オニノ タイシヨオワ オジイサンニ
 コレカラモ トキドキ キテ オドッテ
 クダサイト イイマシタ オジイサンワ
 ヨロシイ コノ ツギニワ モット
 ジョオズニ オドッテ ミセマシヨオト
 イイマシタ オニノ タイシヨオワ

七十頁

タイソオ ヨロコビマシタ[△]シカシ
 オジイサンガ ホントオニ マタ[△]キテ
 クレルカ ドオカ ワカラナイト
 オモイマシタ[△] ミンナデ ソオダンシテ[△]
 コンド[△]キテ クダサル トキマデ
 オジイサンノ ミギノ ホオニ アル コブオ
 アズカ[△]ツテ オキマシヨオ[△]ト イイマシタ[△]
 オジイサンワ コレワ ダイジナ コブデス
 アズケル コトワ デキマセン[△]ト イッテ
 オシソオナ フウオ シマシタ[△] オニノ

七十一頁

七十二頁

タイシヨオワ オジイサンガ
 オシガルノダカラ ヨホド ダイジナ モノニ
 チガイ ナイ[△]ト オモイマシタ[△] ソオシテ[△]
 コブオ トッテ シマイマシタ[△] ヨガ
 アケマシタ[△] オニワ ドコニモ
 イマセンデシタ[△] オジイサンワ ユメオ ミテ
 イタノデワ ナイカト オモイマシタ[△] ミギノ
 ホオオ ナデテ ミマシタ[△] ヒダリノ ホオオ
 ナデテ ミマシタ[△] ミギノ ホオニモ コブワ
 アリマセンデシタ[△] ヒダリノ ホオニモ

七十三頁

七十四頁

コブワ アリマセンデシタ

[甲] (イ) 發音 マワリデ(六十四頁)日常の俗語で屢々マアリデと發音する。従つて此處もさうなり易い。成るべくはつきりマワリデとワを發音する様に練習した方がよい。

(ロ) アクセント ミギノ ホオニ、アクセントは「右の方に」といふ語と同じである。コブノ、單獨にはコブである。従つてコブガ、コブオ等といふ。ノの附く時は例外でコブノと平板式にいふ。キツテイルト、續けていふ時が多い。フツテキマシタ、續けていふ時キマシタのアクセントが餘り高くない。同様の例は、マツテイマシタ(六十三頁)、アツマツテイマシタ(六十四頁)、キテクルルカ(七十頁)、トツテシマイマシタ(七十二頁)、ナデテミマシタ(七十三頁)。イツノマニカ、常に續けていふ。又はイツノマニカといふ型も行はれてゐる。別々にはイツノ、マニカである。ネムツテシマイマシタ、續けていふ時此の型の様にいふ。同様の例はヤンデイマシタ(六十三頁)、オドツテイマシタ

(六十四頁)、タマラナクナリマシタ(六十五頁)、オドツテクダサイ(六十八頁)、オドツテミセマシヨオ(六十九頁)。メガサメタ、續けていふ時サメタのアクセントが餘り高くない。モオ、日常の言葉では殆ど常に平板式である。時にモオの型を使ふ人もある。オソロシイコトモ、續けていふ時コトモのアクセントが餘り高くない。オニノ、單獨及び他のテニヲハの附く時はオニ、オニガ、オニニ等であるガのの附く時は平板式である。コノツギニワ、又はコノツギニワともいふ。チガイナイ、續けていふ時此の型の如くにいふ。ヨガアケマシタ、續けていふ時アケマシタのアクセントが餘り高くない。ドコニモ、又はドコニモともいふ。

[乙]

(イ) 斷續 オジイサンワイツノマニカ……もし切るならばオジイサンワの次で切る。オジイサンワイツノマニカと續けてその終で切るのは良くない。モオヨルデまで續ける。タクサンノオニガの次は切らない方がよい。ジブンモの次も切らない方がよい。アレワナンダトイイナガラの次で切る方がよい。ソレニワカマワズウタオ

ウタイナガラと續けて其の前後を切るのは良くない。キテクレルカドオカの次は斷續隨意。

(ロ) 速度 アレワナンダといふ鬼の言葉は稍速くいふ。驚く心を示す。ヨガアケマシタ—オニワドコニモイマセンデシタは前夜の騒ぎに引きかへて靜かな翌朝の景色を表すため、多少遅くいふのも面白いであらう。

(ハ) 抑揚調子 コブノアルオジイサンを強める。オニガ(六十四頁)を強める。オドリガスキデシタを強める。『大ソウ』を強め過ぎない様注意。トビダシマシタを強める。アレワナンダ、ナンダの方を強める。尻下りの調子にする。ワイワイを強める。コレワオモシロイ、コレワを強める。オモシロイの方を強めては甚だ良くない。オドッテクダサイ、終は尻下りの調子。モットジョオズニ、モットの方を強める。これは今迄の自分の踊りが既に上手であつたことを自覺(自負?)してゐる心である。もしジョオズニの方を強める時は「今日の踊りは下手であつた」といふ謙遜の心を示すことになる。『ヨロシ

イ』といふ斷乎たる返事をした所を以て見れば、此處は上手であつたことを自負(?)する心であると解釋してよい。ホントオニを強める。アズカッテを強める。『大ジナコブデス』ダイジナの方を強める。もしコブデスを強めると「これは瘤といふ物です」と説明する様な意になる。それは良くない。ヨホドを強める。トッテシマイマシタを強める。ユメオを強める。『右ノホホニモ』『左ノホホニモ』『アリマセンデシタ』を強める。

ジュウサン—カゲエ—

此の課は舊尋常小學國語讀本卷二(五十四頁以下)と同じである。左記を参照されたい。

神保格國語讀本の發音とアクセント」尋一篇卷二の三十四頁以下。

神保格話言葉の研究と實際」明治圖書株式會社發行、二六五頁以下に「資料第三」と

して此の課の朗讀の解説。

コロムビア教育レコードの中尋常小學國語讀本による讀方の研究「神保格吹込」カゲエに就て』(レコード番號三三〇〇五)此の課の全文の朗讀實演を一例として吹込んである。

七十五頁

オジサン コンヤモ マタ カゲエオ シテ
 ミセテ クダサイ ソレデワ ショオジノ
 ムコオニ オスワリナサイ サア イヌデス
 オオキナ クチオ アイテ ワンワン
 コンドワ キツネ コンコン ミミオ ゴラン
 コレワ トビ クチバシオ ゴランナサイ
 オジサン ハヤク センドオサンオ ミセテ
 クダサイ ハイ コレワ センドオサン

七十六頁

七十七頁

ナガイ タケノ サオデ フネオ コギマス
 コレカラ ユビノ クミカタオ
 オシエマスカラ ミンナデ ヤッテ
 ゴランナサイ

[甲] (イ) 發音 クチオアイテ、これが普通の云ひ方である。『口をあけて』でなければならぬ等と論ずるのは宜しくない。日常語の慣用を標準とすべきである。

(ロ) アクセント マタ、前出(三十五頁参照)。ミセテクダサイ、續けていふ時クダサイのアクセントが餘り高くない。クミカタ、比較、クム組、參考、クム(平)汲、クミカタ(平)汲み方。

[乙] (イ) 斷續 休止(—)は指で形を組立てる時間を示す。『口バシヲゴランナサイ』から『ヲヂサン早く云々』の間は休止を置かない。子供が早くと催促する心を示す。ハイといふ返事は直に云つてよい。そ

れからコレワセンドオサンまでの間は例によつて指で形を組む時
間を示すため休止を置く。

(ロ) 速度 オジサンの言葉は成人(もし老人ならば猶更)の言葉としてや
ゝ遅くいふ。オジサンハヤク云々は子供たちの待ちかねて居る心
を示すため多少速くいつて良い。

(ハ) 抑揚調子 始めのオジサンの終は尻上りでも尻下りでもよい。上
げれば柔かく呼び掛ける氣持になる。男の兒の言葉ならば尻下り
にして勢よくいふ。コンヤモを強める。カゲエオを強める。シヨ
オジノムコオニの方をオスワリナサイよりも強める。イヌデス、及
びキツネ、トビ等一々新しい物を提出する時その語を強めること勿
論である。ワンワン、コンコン、わざと動物の鳴聲の真似をするのも
面白いであらう。『耳ヲゴラン』『口バシヲゴランナサイ』の終共に
尻上りの方がよい。センドオサンオといふ子供の言葉を強める。

ジュウシ ユキ

ユキ	ワ	ス	コ	シ	モ	オ	ト	オ	タ	テ	ズ	ニ	フ	ツ	テ
イ	マ	ス	マ	ド	ノ	ソ	ト	ノ	ツ	バ	キ	ノ	ハ	ガ	
イ	ツ	ノ	マ	ニ	カ	マ	ツ	シ	ロ	ニ	ナ	リ	マ	シ	タ
カ	ゼ	ガ	フ	ク	ト	ハ	ナ	ビ	ラ	ノ	ヨ	オ	ナ	ユ	キ
ト	キ	ド	キ	マ	ド	カ	ラ	ヘ	ヤ	ノ	ナ	カ	エ		
マ	イ	コ	ン	デ	キ	マ	ス	ソ	ノ	タ	ビ	ニ	コ	タ	ツ
ウ	エ	ノ	ネ	コ	ガ	サ	ム	ソ	オ	ニ	ハ	ナ	ノ	ウ	エ
シ	ワ	オ	ヨ	セ	マ	ス	ヒ	ル	ス	ギ	ヨ	ソ	カ	ラ	

カ|エ|つ|テ イ|ラ|つ|シャ|つ|タ オ|ト|オ|サ|ン|ガ|
 ト|グ|チ|デ パ|タ|バ|タ マ|ン|ト|ノ ユ|キ|オ
 オ|ハ|ラ|イ|ニ ナ|ルト| ド|マ|ガ ユ|キ|ダ|ラ|ケ|ニ
 ナ|リ|マ|シ|タ[△] ソ|ノ|ト|キ オ|ト|オ|サ|ン|ノ カ|オ|オ
 ミ|マ|ス|ト[△] ヒ|ゲ|ノ サ|キ|ニ ミ|ズ|ノ タ|マ|ガ
 ツ|イ|テ イ|タ|ノ|デ[△] ミ|ン|ナ オ|オ|ワ|ラ|イ
 シ|マ|シ|タ[△]

[甲]

(イ) 發音 イラつシャつタ、東京の日常語でイラシつタといふ事が多い。
 こゝは原文通りに従つた方がよい。
 (ロ) アクセント タテズ、比較タテル。フツテイマス、續けていふ時イマ
 スのアクセントが余り高くない。同様の例、マツシロニナリマ

[乙]

(イ) 斷續 タテズニこの次は成るべく切らない方がよい。イツノマニ
 カの次も切らない方がよい。ヘヤノナカエの次も切らない方がよ
 い。ネコガの次は斷續隨意。サムソオニの次も切らない方がよい。
 トダチデの次は斷續隨意。バタバタの次は切らない方がよい。ヒ
 ゲノサキニの次も切らない方がよい。
 (ロ) 速度 通常。特に變化を附けるべき處無し。

シタ、マイ|コ|ン|デ|キ|マ|ス、カ|エ|つ|テ|イ|ラ|つ|シャ|つ|タ、ユ|キ|ダ|ラ|ケ|ニ|ナ|リ
 マ|シ|タ、オ|オ|ワ|ラ|イ|シ|マ|シ|タ、い|づ|れ|も|第|二|の|語|の|ア|ク|セ|ン|ト|が|餘|り
 高|く|な|ら|な|い。ツ|バ|キ、參|考、俗|語|で「唾|液」を|ツ|バ|キ|と|い|ふ。イツノマ
 ニカ、前出(六十四頁原書六十三頁)。ハナビラ、又は平板式にいふ人もあ
 る。ソノタビニ、別々にはソノ(平)、タビニ。ウエノ、ノの附く例に限
 り平板式である。他はウエ、ウエガ等。ヒルスギ(平)、名詞として後
 にテニヲハを附ける時はヒルスギニ、ヒルスギワ等。オハライニ、比
 較、ハラウ。ソノトキ、別々にはソノ(平)、トキ。ツイテ「附」 參考、ツイ
 テ(平)「突」。

(ハ) 抑揚調子 スコシモオトオを強める。ツバキを強める。マツシロニを強める。ユキダラケを強める。ミズノタマを強める。オオワライを強める。

ジュウゴ ユキヨフレフレ

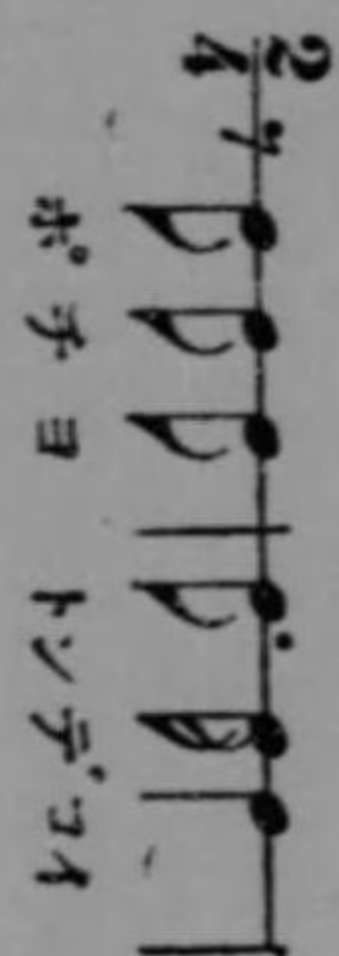
ユキヨフレフレ オオユキ コユキ
 ケサカラ ツモッテ シセンチ ゴセンチ
 モットフレフレ ドンドン ツモレ
 ユキヨフレフレ ホチヨ トンデ コイ
 ハタケモ マツシロ ミチモ マツシロ
 マツシロナ ナカオ ハシッテ イコオ

[速]

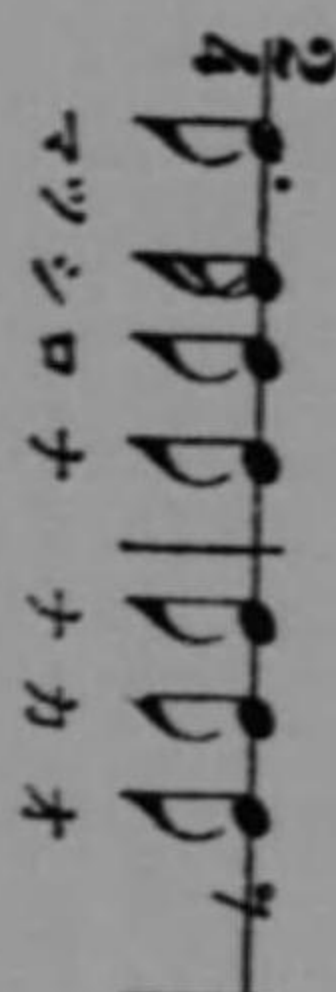
(イ) 發音 いふべき事無し。
(ロ) アクセント ツモッテ、又は平板式にいふ人もある。ツモレも同様。ハシッテ、シの母音が屢、無聲化する。その時アクセントはハシッテとなる。

[乙]

(イ) 斷續 本文表記の外特にいふべき事無し。
(ロ) 速度 稍速めに云ふのが適當であらう。
(ハ) 抑揚調子 全體を勇ましく勢よくいふのがよいであらう。ポチヨトンデコイのリズムは



マツシロナナカオは



とすると規則正しいリズムになる。但し完成したる朗讀においては自然の言葉の調子の方を主とし、リズムは餘り大袈裟にはない

方がよい。

ジュウロク　ハナサカジジイ

ムカシ　ムカシ　アル　トコロニ

オジイサンガ　アリマシタ　イヌオ　イツピキ

カッテ　タイソオ　カワイガッテ　イマシタ

アルヒ　イヌガ　ハタケノ　スミデ　ココ

ホレ　ワン　ワン　ココ　ホレ　ワン

ワン　ト　ナキマシタ　オジイサンガ　ソコオ
ホッテ　ミマスト　ツチノ　ナカカラ

オカネヤ　タカラモノガ　タクサン　デマシタ

トナリノ　オジイサンワ　ヨクノ　フカイ

ヒト　デシタ　コノ　ハナシオ　キイテ　イヌオ

カリニ　キマシタ　ソオシテ　ムリニ　イヌオ

ナカセテ　ハタケオ　ホッテ　ミマシタガ

キタナイモノ　バカリ　デマシタ

オジイサンワ　オコッテ　イヌオ　コロシテ

シマイマシタ　イヌオ　カワイガッテ　イタ

オジイサンワ　タイソオ　カナシミマシタ

ソオシテ　イヌノ　オハカオ　ツクッテ

八十八頁

八十九頁

九十頁

ソコエ チイサナ マツオ イッポン
 ウエマシタ マツワ ズンズン オオキク
 ナリマシタ オジイサンワ ソノ マツノ
 キデ ウスオ コシラエマシタ ソレデ
 コメオ ツクト オカネヤ タカラモノガ
 タクサン デマシタ トナリノ
 オジイサンワ マタ ソノ ウスオ カリニ
 キマシタ ソオシテ コメオ ツイテ
 ミマシタガ キタナイモノ バカリ
 デマシタ マタ オコつテ ウスオ コワシテ

九十一頁

ヒニ クベテ シマイマシタ イヌオ
 カワイガつテ イタ オジイサンワ ソノ
 ハイオ モラつテ キマシタ スルト カゼガ
 フイテ キテ ハイオ トバシマシタ ソレガ
 カレキノ エダニ カカつタカト オモウト
 イチドニ パット ハナガ サキマシタ
 オジイサンワ ヨロコビマシタ ハイオ
 ザルニ イレテ ハナサカジジイ
 ハナサカジジイ カレキニ ハナオ
 サカセマシヨオト イつテ アルキマシタ

九十二頁

トノサマガ オトオリニ ナツテ コレワ
オモシロイ ハナオ サカセテ ゴラン>ト

九十三頁

オツシャイマシタ[△] オジイサンワ カレキニ
ノボリマシタ[△] ソオシテ[△] ハイオ マキマスト[△]
カレキニ ハナガ サイテ[△] イチメンニ

九十四頁

ハナザカリニ ナリマシタ[△] コレワ フシギダ[△]
キレエダ キレエダ>ト オホメニ ナツテ[△]
ゴホオビオ タクサン クダサイマシタ[△]
トナリノ オジイサンワ[△] ノコツテ イタ
ハイオ カキアツメテ[△] カレキニ ノボツテ

九十五頁

トノサマノ オカエリオ マツテ イマシタ[△]
ソコエ トノサマガ オトオリニ ナツテ[△]
モオ イチド ハナオ サカセテ ゴラン>ト

九十六頁

オツシャイマシタ[△] オジイサンワ ハイオ
ツカンデ マキマシタ[△] イクラ マイテモ
ハナワ サキマセン[△] シマイニ ハイガ
トノサマノ メヤ クチニ ハイリマシタ[△]
トノサマワ コレワ ニセモノダ[△] ニクイ

九十七頁

ヤツダ>ト オツシャイマシタ[△] オジイサンワ
トオトオ シバラレテ[△] シマイマシタ[△]

[甲]

(イ) 發音 イッピキ、日常の發音ではビの母音が無聲化する。此處も無聲化のまゝで發音して差支ない。ココ、日常稍速い談話では始めのこの母音が無聲化してココと發音する。此處は無聲化しない様にいふ方がはつきりしてよい。キレエダ、これも日常多く使ふ語でキレイといはない。オモウト、日常の言葉で多くオモオといふ、此處はオモウといふ方がよい。

(ロ) アクセント アルトコロニ、多く附けて此の型でいふ。カッテ、比較カウ 參考、カウ(平)、カッテ(平)買。カワイガッテイマシタ、續けていふ時イマシタのアクセントが餘り高くない。これと同様の例は、ホッテミマスト(八十五頁)、オオキクナリマシタ(八十七頁)、ツイテミマシタガ(八十九頁)、クベテシマイマシタ(九十頁)、フイテキテ(九十頁)、マッテイマシタ(九十四頁)、シバラレテシマイマシタ(九十六頁)。スミデ、參考、スミ、スミデ、墨、炭。ココホレ、續けていふ時此の型の様にいふ。ソコオ、參考、底をも同じ平板式。ツチノ、ノが附くので平板式、比較、ツチ、ツチデ等。タカラモノガ、又はタカラモノガ。ヨ

[乙]

(イ) 斷續 イヌガ(八十四頁)の次は斷續隨意。ソコエ(八十七頁)の次とチイサナマツオの次とは切らない方がよい。マツノキデ(八十八頁)の次も切らない方がよい。ソレガ(九十頁)の次も切らない方がよい。

クノ、參考、ヨク善。カリニ、參考、カリニ(狩に)。假にも平板式。キタナイ、モノバカリ。此處はバカリを強めるためキタナイモノバカリの型でいふ。コロシテシマイマシタ、續けていふ時此の型の様にいふ。同様の例は、カリニキマシタ(八十九頁)、モラッテキマシタ(九十頁)、オトオリニナッテ(九十二頁)、オホメニナッテ(九十四頁)。マツノキデ、此處は松の木材を以ての意味として、キデを別の單語としていふ。樹木の種類としてはマツノキを一つの單語とし平板式にいふ。ツクト、比較、ツイタ、附もツク、ツイタ、參考、ツク(平)、ツイタ(平)突。クベテ、比較、クベル。フイテ、吹、參考、フイテ(平)拭。バット、アクセント不定。オトオリニ、比較、トオル。マキマス、比較、ホメル。カキアツメテ、又は平板(平)卷、マキマス卷。オホメニ、比較、ホメル。カキアツメテ、又は平板式にいふ人もある。マッテ待マツ、參考、マッテ(平)舞つて「マウ舞」。

イチメンニ(九十三頁)の次も切らない方がよい。ノボツテ(九十四頁)の次も切らない方がよい。ハイガ(九十五頁)の次、クチニ(九十六頁)の次も切らない方がよい。

(ロ) 速度 通常。特に著しく速度の変化を付けるべき處なし。

(ハ) 抑揚調子 『犬ヲカリニ』(八十六頁)カリニの方を強める。ムリニを強める。コロシテシマイマシタを強める。『小サナ松ヲ一ボン』松ヲの方を強める。一ボンの方を餘り強めてはよくない。強め過ぎると二本でも三本でもないといふ様な意味に聞えて不適當である。『ウスヲ』を強める。マタ(八十九頁二箇處)を強める。『火ニクベテ』を強める。『ハイヲ』を強める。『花ガサキマシタ』を強める。『コレハ』(九十二頁九十三頁)を強める。『一メンニ花ザカリニ』を強める。『モウ一ド』を強める。『コレハ』(九十六頁)は強めない。『ニセモノダ』の方を強める。『シバラレテ』を強める。

ジュウシチ ウグイス

ヨシ	オサン	モ	オ	シ	チ	ジ	ス	ギ	マ	シ	タ	ヨ
ハ	ヤ	ク	オ	キ	ナ	イ	ト	ガ	ツ	コ	オ	ガ
オ	ク	レ	マ	ス	ト	ネ	エ	サ	ン	ガ	イ	イ
マ	イ	ト	ヨ	シ	オ	サ	ン	ワ	ヘ	ン	ジ	オ
シ	マ	シ	タ	ガ	マ	タ	ネ	テ	シ	マ	イ	マ
ヨ	シ	オ	サ	ン	ヨ	シ	オ	サ	ン	ハ	ヤ	ク
ガ	ツ	コ	オ	ガ	オ	ク	レ	マ	ス	ヨ	ネ	エ
マ	エ	ヨ	リ	モ	オ	オ	キ	ナ	コ	エ	デ	イ
					オ	オ	キ	ナ	コ	エ	デ	イ
					イ	イ	マ	シ	タ			

九十九頁

ヨシオサンワ スグ オキヨオト

オモイマシタ[△] ケレドモ ネムクテ[△] ネムクテ

タマリマセン[△] ソノトキ ニワノ ホオデ

ホオホケキヨ[△] > ト ウグイスノ ナク コエガ

シマシタ[△] ネエサンワ アラ ウグイスヨ>ト

イツテ ショオジノ ガラスカラ ソトオ

ミマシタ ソオシテ[△] モオ ハルデスヨ[△]

ヨシオサンモ ジキ ニネンセエデワ

アリマセンカ[△] サアサア ハヤク

オキナサイ>ト イイマシタ[△] ヨシオサンワ

百頁

百一頁

トビオキマシタ[△] ニワデワ マタ

ウグイスガ[△] ホオホケキヨ>ト ナキマシタ[△]

[甲] (イ) 發音 ニネンセエ、これも日常多く使ふ語で通常ニネンセイといはない。
(ロ) アクセント モオ、日常の言葉で平板式にいふ方が多い。前出(六十五頁参照)。マタ、前出(三十五頁参照)。ネムクテ、比較、ネムイ(平)。ソノトキ、別々にはソノ(平)トキであるが、此處は續けてソノトキといふ。ホオホケキヨ、これは鶯の聲に擬していふ故にアクセントとして確定しない方がよい。強ひてアクセントの型の如く表記すればホオホケキヨであらう。ガラス、又はガラス、此の二様の型が共に同じ位多く用ひられる。

[乙] (イ) 斷續 『ヘンジヲ シマシタガ』の次に多少の休止を置いても良い。次の『ヨシヲサン、ヨシヲサン』と二度重ねて呼ぶ、その二度の間は續

けても切つても良い。切る時又は稍長く休止する時は一度呼んで起きるかどうか暫く見ること、さうしてまだ起きさうもないので又再び呼んで見るといふ心を示すことになる。朗讀する人の解釋次第でいづれでもよい。『トビオキマシタ』から次の『ニハデハ』へ移る間に稍長い休止を置くとよい。

(ロ) 速度 「ハイ」といふ返事は睡氣半分の心で遅くいふ。『アラ、ウグヒスヨ』といふ姉の言葉は稍速くいふ。『トビオキマシタ』も稍速くいふ。前の『マタネテシマヒマシタ』と對照すること注意。

(ハ) 抑揚調子 此の課はすべて出来るだけ日常自然の言葉に近くいふのが適當である。ヨシオサンの終、スキマシタヨの終共に尻上りの調子、オクレマスの終は尻下り。『七時スキマシタ』を強める。ネエサンがは餘り強め過ぎない様注意。ハイといふ返事はねむさうな聲を使ふと面白いであらう。次の姉の言葉の『ヨシオサン』の終、オクレマスの終、共に尻上りの調子。『前ヨリモ大キナ』は大キナの方を強める方がよい。『前よりも』の方を強め過ぎると前に既に大き

な聲を出した、今度はそれよりも尙一層大きな聲といふ様な意味に聞えないでもない。こゝはそれ程の意味を附けないでよい。ホオホケキヨ、之は鶯の聲に擬する方がよい。アラ、婦人の言葉として調子の上下を稍多く附ける。「ラ」を尻下りにいふ。『ウグヒスヨ』の終は尻上り。『春デスヨ』『アリマセンカ』『オキナサイ』いづれも終を尻上りにいふ。『春』『チキ二年生』を強める。この邊の姉の言葉はすべて出来るだけ柔かくいふ。強い語氣でいふと、叱る様に聞えて宜しくない。トビオキマシタを強める。マタを稍強める。

ジュウハチ ツクシ

ポカポカト アッタカイ ヒニ ツクシノ
 ボオヤワ メガ サメタ ツクシ ダレノ

コ スギナノ コ ドテノ ツチ ソット
 アゲテ ツクシノ ボオヤガ ノゾイタラ
 ソトワ ソヨソヨ ハルノ カゼ

[甲]

(イ) 發音 いふべき事無し。

(ロ) アクセント 『日ニ』平板式にいふのが通常であるが、『ヒニ』の型でいふこともある。参考、一日に就き三回の意の時、『ヒニ』サンドといふのが通常である。メガサメタ、續けていふ時サメタのアクセントが餘り高くなるらない。

[乙]

(イ) 斷續 ボオヤワの次は切らない方がよい。ノゾイタラの次、語句の配置上、第一節と同じ形式の處であるが、變化を附けるため此の終で休止を置くとよいであらう。同様に第一節『ダレノ子』の次は切らな

(ロ) 速度 全體ゆつくりした速度が適當である。

ジユウク キシャ

(ハ) 抑揚調子 『ダレノ子』の終は尻上りでも尻下りでもいづれでもよい。

ゴオつ ト オクノ ホオデ オトガ
 シマシタ キシャダ マサチャン ミニ
 イコオト ニイサガ イイマシタ
 ボクたちワ ハタケノ ナカノ ミチオ
 ハシつテ センロノ ホオエ イキマシタ
 キシャワ ミルマニ オオキク ナつテ

百六頁

コッチエキマスカモツレツシャダナガイ
ナガイトニイサンガイイマシタシュツ

百七頁

シュツシュツトキカンシャガオオキナ

オトオタテテトオリマシタイクツ

アルカカゾエテミヨオトニイサンガ

イイマシタクロイハコノクルマガ

百八頁

アトカライクツモキマスイチニサン

シトカゾエテジユウニマデキタトキ

ウシノタクサンノツテイルクルマガ

イクツカトオリマシタオヤトオモツテ

百九頁

イルアイダニボクワクルマノカズガ

ワカラナクナリマシタウシノアトカラ

オオキナキオツンダクルマヤイシオ

ツンダクルマガイクツモトオリマシタ

百十頁

オシマイゴロニナルトニイサンワ

オオキイコエオダシテカゾエマシタ

サンジュウロクサンジュウシチ

サンジュウハチミンナデサンジュウ

ハチアッタトイイマシタキシヤワ

ダンダンチイサクナツテトオクノ

ホ|オ|エ| イ|つ|テ| シ|マ|イ|マ|シ|タ|一|一| ボ|ク|ワ|
 サ|つ|キ| ミ|タ| ウ|シ|ノ| コ|ト|オ| カ|ン|ガ|エ|テ|
 ボ|ク|モ| キ|シ|ヤ|ニ| ノ|リ|タイ|ナ|ア|>|ト|
 オ|モ|イ|マ|シ|タ|一|

[甲]

(イ) 發音 ハシつテ、稍速くいふ時シの母音が無聲化する。前出七十五頁参照。従つてアクセントはハシつテの型にいふ。クワモツ、キクワシヤ、クワと書く音はカでよい。今日の處クワを用ひる地方では強ひてカ音を出させないでよい。シユつといふ擬音はすべて無聲化していつて良い。『一、二、三、四』數へる時「ニイ」「シイ」と二音節にいつて「一」「三」と音節數を同じにするのが通常である。此處もニイ、シイといつて差支ない。イクツカ、速くいふ時クツ共に母音が無聲化してイクツカといふ。はつきりいふ時はイクツカとツの方の母音だけ

無聲化する。

(ロ) アクセント ゴオつはアクセント不定。オトガシマシタ、續けていふ時シマシタのアクセントが餘り高くない。同様の例、ミニイコオ(百四頁)、オオキクナつテ(百五頁)、イクツアルカ(百七頁)、カゾエテミヨオ(百七頁)、キタトキ(百八頁)、ワカラナクナリマシタ(百九頁)、オシマイゴロニナルト(百九頁)、チイサクナつテ(百十頁)。ボクたち、又は平板式、後に出るボク皆同じ。ハシつテ、アクセントについて(イ)發音の條參考。イクツモ、比較、イクツカ。イチ、ニイ、サン、シイ、數へる時は常に此の型でいふ。キタトキ、此處は續けてキタトキといふ方がよい。オヤ、アクセント不定、後出(抑揚調子の項参照)。キオ、參考、キオ(平氣を)。ツンダ(平積んだ)「摘んだ」、參考、ツンダ「詰まつた」。イシ參考、イシ、醫師、意志。『三十六』『三十七』『三十八』續けていふ時ロク、シチ、ハチのアクセントが高くない。こゝは續けていふ方がよい。ダンダン此處は「次第に」の意で平板式、參考、ダンダンは「階段」又は「階段狀」の意。イツテシマイマシタ、續ける時此の型の様にいふ。ウ

〔乙〕

シノコトオ、續ける時ウシノコトオともいふ。

- (イ) 斷續 トオクノホオデの次は切らない方がよい。『正チャン』と呼びかける次は斷續隨意。『長イ、長イ』と二回繰返す、その間も斷續隨意ではあるが、寧ろ切らない方がよいであらう。シュツ……トキカンシヤガの邊、キカンシヤガの次で切るならば、その前のトの次で切る。……トキカンシヤガと續けてその終で切るのは良くない。トで切つて文の終(トオリマシタ)迄續けてもよい。タテテの次は切らない方がよい。カゾエテの次は切らず『來タ時』の次で切る。カズガの次は切らない方がよい。『コエヲ出シテ』(百十頁)の次は切らない方がよい。

- (ロ) 速度 『キシヤダ。正チャン、見ニイカウ』は稍速くいふ。シュツシヤツ等の擬音の速さは餘り遅過ぎない方がよい。どの位の速さでいふかは兒童自身で機關車運轉の有様を觀察することに依つて工夫させるのも一つの方法である。此處は「見る間に大きくなり」だんだん小さくなる」といふ叙述により、貨物列車としては相當の高速速度

であらう。従つて煙突から(煙と共に)排出する蒸氣の音響は可なり速いものと考えべきである。『一、二、三、四』と數へる速さも可なり速くてよい。『三十六、三十七、三十八』も同様である。但し、『ミンナデ』云々は數へ終つて後いふ事であるから多少速度を變へて遅くいつてよい。終の『ボクモ』云々は遅くいふ。

- (ハ) 抑揚調子 ゴオつといふ擬音は任意に長く云つて差支へない。キシヤダを強め、ミニを強める。イクツとカゾエテとを強める。イクツモ(百七頁及び百九頁兩方とも)を強める。百八頁第四行のイクツカは特に強めない。オヤ、アクセント不定であるが、此處はヤの方を高い調子でいふ。オの方を高い調子でいふのは此の場合良くない。『木ヲ』『石ヲ』を強める。『三十六』云々の兄の言葉、三十七、八と進むにつれ次第に「大きい聲」を出す。『三十八、これで全部』といふ心で三十八といふ最後の數を最も大きくいふのは兒童等の屢行ふ所である。『ミンナデ三十八』云々此の「八」といふ一位の數字を特に強くいふ方がよいであらう。『ダンダン小サク』以下次第に聲を弱めることに

よつて遠ざかる有様に擬するのも一つの表現法である。


〔附記〕

卷二の中〔三〕アシタハエンソク、〔九〕ニンギヤウノビヤウキ、〔十七〕ウグヒス、〔十八〕ツクシ、〔十九〕キシヤの五課はコロムビア教育レコードの中に神保格吹込のものがある。参照されたい。

オワリ

小學國語讀本朗讀法(後期用) 終

昭和八年十月十一日 印刷
昭和八年十月十四日 發行



小學國語讀本朗讀法(卷二) 【定價九拾錢】

著者 神保格

發行所 岡本正一

印刷所 山本禎男

印刷所 宗文社印刷所

東京市麹町區下六番町四十八番地

東京市牛込區山吹町三丁目百九十八番地

東京市牛込區山吹町三丁目百九十八番地

東京市牛込區山吹町三丁目百九十八番地

發兌 出版 厚生閣書店

東京市麹町區下六番町四十八番地

電話東京五九六〇〇番

電話九段三二一八番

Handwritten mark

ヴァン・ルーアの地理學 内山賢次氏譯著
(上巻) 價二・八〇 (下巻) 價二・五〇 各二・三〇

國史教育の新思潮と實際經營 海老澤匡氏著
價三・二〇 送二・二〇

【圖畫・手工】

圖畫の教育 關衛氏著
價二・五〇 送一・四〇

圖案の學習 關衛氏著
價二・三〇 送一・四〇

圖畫指導の生かし方と要領 日本美術會編
(尋一より尋六迄) (全六冊) 價各・六〇 各一・〇〇

幼稚園や低學年の生活圖畫指導 三森連象氏著
價二・六〇 送一・四〇

手工指導書 霜田靜志兩氏著
(尋一より尋六まで) (全六冊) 尋一用より尋四まで各價一・五〇 尋五、六用各二・〇〇 送各一・四〇

實際活用を主としたる新手工科教授細案 島山康親氏著
價二・九〇 送二・三〇

【體育・舞踊】

體育新心理學 齋藤薫雄氏著
價二・三〇 送一・四〇

兒童陸上競技の指導と實際 齋藤薫雄兩氏著
價二・八〇 送一・四〇

體育教材としての學校舞踏三十四講 小瀬峰洋氏著
價一・〇〇 送一・〇〇

幼稚園の舞踊 石井小浪氏著
價〇・八〇 送一・二〇

尋一の舞踊 石井小浪氏著
價〇・八〇 送一・二〇

尋二の舞脚 石井小浪氏著
價〇・八〇 送一・二〇

【學藝會・兒童劇】

學藝會運動會の新研究 北村久雄氏著
價二・八〇 送一・四〇

國語讀本を戯曲化する兒童劇脚本 宮川菊芳兩氏著
價三・〇〇 送一・四〇

